

芦屋大学論叢 第76号
(令和4年3月24日)抜刷

《研究ノート》

小学生のバスケットボール競技における
ルールに関する一考察

ースペインとの比較を通してー

石 川 峻

《研究ノート》

小学生のバスケットボール競技におけるルールに関する一考察

—スペインとの比較を通して—

石川 峻
芦屋大学臨床教育学部

I. 緒言

バスケットボールは1891年、アメリカにてジェームス・ネイスミスにより考案された。発祥地であるアメリカにはNational Basketball Association（以下、NBAと略す）という世界最高峰のプロバスケットボールリーグが存在する。1992年のバルセロナオリンピックではNBA所属選手がアメリカ代表として参戦し、圧倒的な力の差を見せつけた。しかし、その後、男子バスケットボールは1990年代後半から2000年代にかけて勢力図の変化、特にヨーロッパの躍進が見られた（北村，2007）。これはNBAに所属する選手を多数起用したアメリカ代表に対抗するため、長期的な競技者育成プログラムに取り組んだ成果と関係者・メディアから高い評価を得ている（北村，2007）。

ところで、日本における小学生（U12）のバスケットボールは「ミニバスケットボール」と呼ばれ、リングの高さやボールの大きさをはじめ、いくつかのルールが他の年代とは異なる（表1）。日本バスケットボール協会（online 3）におけるミニバスケットボールの競技登録者数は135,058人、チーム登録数は5,729チーム（2021年3月1日時点）であり、これは全体において競技者では約27%、チームでは約18%を占めている。このように多くの者が小学生からバスケットボールに親しんでいる。しかし、近年、育成システムの構築（日本バスケットボール協会，2016a）や、小学生における発育状況を考慮した競技形式（マンツーマン¹⁾、少人数、リング、ボール、時間、ルール等）の整備（日本バスケットボール協会，2019a）が課題として挙げられている。そのような中で、マンツーマンディフェンスの推進、リーグ戦、飛び級ルールの導入、ショットクロック、タイムアウト回数の変更など、小学生における制度やルールの改革が実施されている。2016年より日本においては中学生（U15）以下のゲームでのゾーンディフェンス²⁾を禁止し、マンツーマンディフェンスを推進している（日本バスケットボール協会，2016b）。これは1対1のオフェンスやディフェンス、合わせの動きなどのバスケットボールを行っていく上での土台、言い換えれば個の能力をこの年代で育成するためである（日本バスケットボール協会，2018）。リーグ戦導入は拮抗した対戦を増やし、選手・指導者の成長を促すことと、JBA登録チームに一定公式試合数を確保することが目的である（日本バスケットボール協会，2019b）。また、リーグ戦においてU12の選手がU15のリーグ戦に参加するなど飛び級も認められている。2019年度以降はショットクロック³⁾が30秒から24秒に、タイムアウト回数が前後半1回ずつから2回ずつに変更された。ショットクロックにおいては、1対1の攻防とショットのチャンスを増やし、よりスピーディーな試合展開を目指す目的で、タイムアウト回数においてはプレーヤーによりきめ細かく指導する機会を確保する目的で変更された（日本バスケットボール協会，2019c）。

内山（2012）は「ルールは競技力の形成と向上にかかわる」と、鈴木（2017）は「ルールは選手の成長に影響を与える」と述べているように、子どもたちをどんな選手に育てたいかという理念に基づいてルール

を採用することが重要であり、選手の成長を第一に考え、ルールを柔軟に変更していく必要がある（鈴木，2017）。

表1 ミニバスケットボールと他の年代のルールの違い

項目	ミニバスケットボール	他の年代
ボール	男女ともに5号球	男子7号球，女子6号球
リング	260cm	305cm
コート	縦28～22m×横15～12m	縦28m×横15m
試合時間	6分×4クォーター	10分×4クォーター (U15のみ8分×4クォーター)
3ポイントショット	なし	あり
バックコートルール	なし	あり
出場の仕方	3クォーターまでに10人以上	制限なし
交代	第1クォーターから第3クォーターまでは、プレーのインターバル中とハーフタイム中のみプレーヤーを交代させることができる。第4クォーター、各オーバータイムでは、「交代が認められる時機」にプレーヤーを交代させることができる。	「交代が認められる時機」に自由にできる。
タイムアウト	各クォーター1回	前半2回，後半3回

日本バスケットボール協会（online 1, online 2, 2007）を参考に筆者作

II. 本稿の目的

近年、躍進しているヨーロッパでは育成年代でローカルルールがある（日本バスケットボール協会，2014；鈴木，2017）。ヨーロッパの中でもスペインのバスケットボールのレベルは世界でもトップクラスであり，その躍進は著しい（蔵元・鈴木，2014；町田ほか，2014）。世界バスケットボール連盟（以下，FIBAと略す）が発表している世界ランキングによると，スペインは男女共にアメリカに次いで2位（2021年8月9日時点），アンダーカテゴリーでは男子は3位，女子は2位（2020年3月4日時点）である（FIBA，online 1）。そこで本稿では，これまでの研究や資料からミニバスケットボールにおける日本とスペインのルールを比較した上で，選手の成長のために必要な，今後の日本のミニバスケットボールのルールに関して検討することを目的とする。

Ⅲ. 育成年代でのルールの比較

スペインは各地方によってローカルルールが存在する (Domínguez et al., 2013)。日本と異なるルールとしては試合時間、出場の仕方、3ポイントショット、人数、得点の表示などである。

1. 試合時間

現在の日本のミニバスケットボールの試合時間は競技規則第5章第16条 (日本バスケットボール協会, 2007) に定められている通り、6分×4クォーターである。それに対して、スペインは大きく3つのタイプに分けることができる。①8分×6クォーター⁴⁾ (e.g.アンダルシア, アラゴン, カンタブリア, ガリシア, マドリッド), ②6分×8クォーター (e.g.カタルーニャ), ③10分×4クォーター (e.g.カタロニア) である (Domínguez et al., 2013)。また、競技中のタイマーは、ファウル⁵⁾ やヴァイオレイション⁶⁾ などを審判が合図した時には止めるが (日本バスケットボール協会, 2007), 倉石 (2014) が「時間を流しっぱなしのゲームもある」と述べるように、例えばアラゴンやエストレマデューラでは、1クォーターの中で最後の1分以外は流しである (Domínguez et al., 2013)。

2. 登録人数と出場の仕方

日本では1チームの登録人数は第4章第13条に「各チームはコーチ1人プレイヤー5人, 交代要員5人~10人で交代要員の5人はゲームにでなければなりません。」と、出場の仕方に関しては、第6章第23条に第「3クォーターまでに10人以上のプレイヤーが1クォーター以上, 2クォーターを超えない時間ゲームにでていなければなりません。」と規定されている (日本バスケットボール協会, 2007)。一方でスペインは、多くの地域では登録人数が最大12人と規定されている。その中で、例えば、8分間で6クォーターであれば、登録されているすべてのプレイヤーは、最初の5クォーター中、少なくとも2つの完全なクォーターをプレーする必要がある、最大で3クォーターまで参加することできると定められている (Domínguez et al., 2013)。また、6分間の8クォーターのカタルーニャでは、最低3クォーター, 最大5クォーターと規定されている。 (Domínguez et al., 2013)

3. 人数

日本では第1章第2条のゲームの目的において、「ゲームは、5人ずつのプレイヤーからなる2チームでおこないます。」と規定されており (日本バスケットボール協会, 2007), 5対5で実施されている。スペインの多くの地方でも5対5で実施されている。しかし、スペインのエストレマデューラでは4対4で実施されている (Domínguez et al., 2013)。

4. 得点

バスケットボールは試合が終了した時の得点の多さを競うスポーツである。日本では、第5章第19条に「ゲームが終了したときに、得点のおおいチームが勝ちとなります。」と規定されている (日本バスケットボール協会, 2007)。スペインでは得点の表示をクォーターごとにリセットする地方もある (倉石, 2014; 日本バスケットボール協会, 2014; 鈴木, 2017)。また、40点差や50点差がつくとそこで試合の記録は終了し、残り時間は個人ファウルの記録だけという地方も存在する (Domínguez et al., 2013)。

5. 3 ポイントショット

日本ではすべてのフィールドゴールが2ポイントであるが、スペインでは3ポイントショットのルールが設置されている（倉石，2014；鈴木，2017；町田，2018，Domínguez et al., 2013）。しかし，通常の3ポイントショットのルール（リングから6.75 mの距離）ではなく，フリースローと同様のリングから4 m離れた距離が3ポイント（Domínguez et al., 2013）や，ペイントエリア注7）の外側からのショットはすべて3ポイント（倉石，2014）などと修正されている。

6. 8 秒ルール

日本において，フロントコート⁸⁾にボールを運ぶ8秒ルールはU15から採用されている。一方で，スペインではミニバスケットボールから採用している地方も多い（Domínguez et al., 2013）。また，10秒に延長している地方もある（Domínguez et al., 2013）。

7. バックパスルール

日本において，U15からフロントコートで一度コントロールしたボールをバックコート⁹⁾に返すことが禁止されている。一方で，スペインではミニバスケットボールからこのルールを採用している地方も存在する（Domínguez et al., 2013）。

IV. 考察

これまで見てきたミニバスケットボールにおける日本とスペインのルールの違いから，選手の成長のために必要な，今後の日本のミニバスケットボールのルールに関して検討する。

1. 出場時間

現在の日本のミニバスケットボールの試合時間は競技規則第5章第16条に定められている通り，6分×4クォーターである。出場の仕方に関しては，第6章第23条に「第3クォーターまでに10人以上のプレイヤーが1クォーター以上，2クォーターを超えない時間ゲームにでていなければなりません。」と規定されている。従って，筆者がこれまで観戦してきた中では，多くのチームで1クォーターと2クォーターでまったく違うメンバーが5人ずつ出場し（この時点で10人以上の出場），3，4クォーターでは10人の中から技能や体格の優れている5人が出場することが多い。従って1試合の中で10人中5人は計3クォーター出場，残る5人は1クォーターのみ出場，さらに残り5人は不出場と出場時間に差がある。

一方でスペインでは，日本より1クォーターの時間が長い，クォーター数が多い，もしくはその両方で，合計の試合時間が長い。しかし，ファウルやヴァイオレーション時もタイマーをストップさせない「流しゲーム」が採用されている。そして，8分間で6クォーターであれば，最初の5クォーター中，少なくとも2つの完全なクォーターをプレイする必要がある，最大で3クォーターまで参加，6分間の8クォーターでは，プレイヤーは，最低3クォーター，最大5クォーターをプレー，10分間で4クォーターであれば日本と同様に第3クォーターまでに1クォーター以上，2クォーターを超えないと規定されている。

これまでの日本のルールでは，技能や体格の優劣で3クォーター出る選手と1クォーターしか出られない選手，不出場の選手と出場時間に差が生じてきた。ゲームへの参加は選手を大きく成長させる機会であり，

選手にゲームでのプレー機会を与えることは重要である（日本バスケットボール協会, online 4）。より多くの出場機会を設けるために、クォーター数を増やすことが考えられる。しかし、そうすると試合時間が長くなるので、残り1分以外は流しゲームを採用することが必要かもしれない。NBA and USA Basketball (online) は日本のミニバスケットボールの年代にあたる9-11歳のカテゴリーでは、出場時間に関して、参加するすべての子どもにゲームを体験する機会を確実に与えるために、第1クォーターから第3クォーターまでは平等で公平なプレー時間、第4クォーターと延長においてはコーチの裁量を推奨している。実際に出場に関するルールを明確に規定することも有効である可能性がある。

2. 3ポイントショット

日本では2016年より個の育成を行うため、マンツーマンディフェンスを推進している。マンツーマンコミッショナーのチェック項目（日本バスケットボール協会, online 5）に「マッチアップエリア内のオンボールには1.5 m以内を目安としてマッチアップしている。」とあるように、オンボールディフェンス注10)では、距離を離さずにマッチアップしてディフェンスすることが求められている。日本のミニバスケットボールでは3ポイントショットはないが、3ポイントショットを導入することで、必然的にショットを打たせないためにもマッチアップすることになるのではないだろうか。そして、そうすることで日本バスケットボール協会（2019 d）が求める個の育成、すなわちオンボールオフェンスでは、「個人で破っていく力、得点を取る力、1対1の駆け引き」、オンボールディフェンスでは「個人で守りきる力・ショット、ドライブを止める（インラインを守り続ける）」に繋がると考えられる。

また、現代のバスケットボールにおいて、3ポイントショットは2ポイントショットの1.5倍の価値があり、3ポイントショットの重要性が再認識されている（佐々木, 2017）。Bリーグにおいては平均3ポイント%や、3ポイントの価値を上乗せしたフィールドゴール%（FG%）であるeFG%と勝敗には有意な相関関係があったことが報告されている（元安, 2018）。佐々木（2017）は「3ポイントショットを安定して決めることができる、つまりそれは2ポイントショットの成功率をさらに高めてくれる潤滑剤でもあり、このような発想から近年のバスケットボール界は3ポイントショットの価値にあらためて気付き、世界的に3ポイントショットが増えている。」と述べている。そして、ミニバスケットボールから3ポイントショットが導入されているスペインの現状を視察した町田（2018）は「ミニのカテゴリーにおける3ポイントルールの有無は、ミニのカテゴリーでの選手育成に対する影響はもちろん、中学生以降の選手達の技術的、戦術的側面にも少なからず影響を及ぼしていると考えられることは何ら不自然では無い。また、それはすなわち、各年代における各チーム、ひいては日本代表チームの戦術や勝敗にすら影響を及ぼしていると考えられるのである。」と述べている。これらのことから、現代バスケットボールでの3ポイントショットの重要性を考えると、ミニバスケットボールからその価値観に触れることは、意義があると考えられる。

他方で、NBA and USA Basketball (online) は子供の発達の観点から、適切なメカニクスとフォームでのショットを推奨するために3ポイントについては否定的である。しかし、町田（2018）は3ポイントラインを一般のルールよりも、よりゴールに近い位置に設置するという工夫によって、一般のルールと同様の内容を維持しているスペインについて、「ルール自体を削除することなく、枠組みを縮小することで、ミニのカテゴリーと中学生以降のカテゴリーの競技特性の共通性を維持しつつ、各カテゴリーの身体的特徴に合わせたゲーム形式を実現しているのである。」と述べている。このように他の年代の3ポイントラインより数mゴールに近づけるなど、育成年代に合う形で良いと考えられる。

3. 人数

日本バスケットボール協会（2019）は小学生年代で発育状況を考慮した競技形式の整備を課題としており、その中の例として「少人数」を挙げている。FIBA（online 2）は「Mini Basketball Dos and Don'ts（ミニバスケットボールにおいてやるべき項目と止めるべき項目）」において、チームで3人または4人のプレーヤーでプレーすることにより、各プレーヤーがボールを手にする機会が増えることから「コートやプレーヤーの数を減らす」ことを推奨している。また、NBA and USA Basketball（online）もプレーへの参加と成長を促進するために3対3のハーフコートでプレーすることを推奨している。日本サッカー協会はボールに関わる回数を増やすことや、ゴール前の攻防を多く創出すること等の狙い（日本サッカー協会，2011）から小学生年代のサッカーを11人制から8人制と変更した。スペインのミニバスケットボールでは多くが5対5であるが、一部地域では4対4で実施されている。

人数を減らすことにより、1人あたりのボール触球数が増加することができる。また、スペースが広く、選択肢が減ることから判断が軽減され（Clemente et al., 2017 ; McCormick et al., 2012）、より多くの成功体験に繋がる可能性があると考えられる。近年、3人制のバスケットボール「3x3（スリー・エックス・スリー）バスケットボール」が2021年に開催された東京オリンピックにも採用され、注目を集めている。石川ほか（2021）は、ミニバスケットボール選手を対象に3人制と5人制について比較している。そして3人制は5人制と比較してチームでの攻撃回数、ショット試投数が多く、攻撃完了率が高いこと、1人あたりの触球数やショット試投数が多いことを報告している。日本バスケットボール協会（2021）が発表した「U12 カテゴリー指導ガイドライン」においても、今後の育成年代の環境に3x3の活用が提言されており、少人数でのゲームの開催が求められる。

V. まとめと今後の課題

本稿では、これまでの研究や資料から世界トップレベルのスペインと日本におけるミニバスケットボールのルールを比較した上で、選手の成長のために必要な、今後の日本のミニバスケットボールのルールに関して検討することを目的とした。その結果、今後の日本のミニバスケットボールには、1) 出場機会の均等化、2) 3ポイントショット、3) 少人数ゲームに関するルールの導入を検討する必要があると考えられた。

しかし、現場の指導者がどのように感じているのか、実際のルール変更による影響がどの程度なのか等は不明である。したがって、現場の指導者へのインタビューやアンケート調査、モデルゲームによる検証については今後の課題としたい。

注

- 1) 各ディフェンスの選手がそれぞれ決められたオフェンスの選手を1対1で守るディフェンス戦術のこと（小野，小谷，2017）。
- 2) 各ディフェンスの選手がコート内の特定のエリアをそれぞれ分担して守るディフェンス戦術のこと（小野，小谷，2017）。
- 3) 1回のオフェンスでショットを放つまでの制限時間のこと。
- 4) 「クォーター」とは本来4分の1という意味であり，4クォーター以上の場合は「ピリオド」を使用することが適切と考えるが，本研究では「クォーター」に統一した。
- 5) 規則に対する違反のうち，相手チームのプレーヤーとの間の不当な身体に触れ合いおよびスポーツマンらしくない行為のこと（小野，小谷，2017）。
- 6) 規則に対する違反のうち，身体に触れ合いおよびスポーツマンらしくない行為（ファウル）を含まないものこと（小野，小谷，2017）。
ex. ダブルドリブル，トラベリング，アウトオブバウンズ
- 7) フリースローラインを含むラインで台形，もしくは長方形に囲われたゴール付近のエリアのこと。
- 8) フルコートにおいて，コートを2分割した際の自チームがショットするゴールがある側のハーフコートのこと。
- 9) フルコートにおいて，コートを2分割した際の相手チームがショットするゴールがある側のハーフコートのこと。
- 10) ボールを持っているオフェンスプレーヤーに対してのディフェンスのこと。

文献

- 1) Clemente, F.M., González-Víllora, S., Delextrat, A., Martins, F.M.L. and Vicedo, J.C.P. (2017) Effects of the sports level, format of the game and task condition on heart rate responses, technical and tactical performance of youth basketball players. *Journal of Human Kinetics*, 58(1): 141-155.
- 2) Domínguez, C. Buñuel, P. and González, J. (2013) Review of the minibasket rules in the different regions of Spain. *Revista de Ciencias del Deporte*, 9 (3) : 173-192.
- 3) FIBA (online 1) FIBA WORLD RANKING PRESENTED BY NIKE. <https://www.fiba.basketball/ranking>, (参照日 2021年12月5日)。
- 4) FIBA (online 2) Mini Basketball Dos and Don'ts. <https://www.cbf.basketball/el/file/1 xIOE 41 R 2 oz 2 nxXo 9+AUZw==/>, (参照日 2021年12月5日)。
- 5) 石川峻・上田毅・橋本真 (2020) 小学生年代のバスケットボールにおける3人制と5人制の比較: 生体負担度, 技能・戦術, ゲーム後の主観的評価から. *バスケットボール研究*, 6: 101-110.
- 6) 北村美夏 (2007) 男子バスケットボール競技における競技者育成プログラムの国際比較. 早稲田大学ビジネス研究科修士論文抄録,
- 7) 倉石平 (2014) スペイン事情 その2. 日本バスケットボール協会: *The Backboard Vol.2*, pp.81-88.
- 8) 蔵元彩・鈴木淳 (2014) スペインバスケットボールにおける競技者育成プログラムの現状と特徴. *福岡教育大学紀要第5分冊芸術・保健体育・家政科編* (63), 125-130
- 9) McCormick, B.T., Hannon, J.C., Newton, M., Shultz, B., Miller, N. and Young, W. (2012) Comparison of physical activity in small-sided basketball games versus full-sided games. *International Journal of Sports Science and Coaching*, 7 (4): 689-698.
- 10) 町田洋介・吉田健児郎・守屋志保 (2014) 平成25年度スペイン研修報告 その1. 日本バスケットボール協会: *The Backboard Vol.3*, pp.64-82.
- 11) 町田洋介 (2018) 日本バスケットボール界における男子選手育成の課題に関する一考察: スペインクラブチームの育成理念及びシステムの現地調査をもとにして. *札幌大学総合研究*(10), 215-233.
- 12) 元安陽一 (2018) 国内プロバスケットボール「Bリーグ」におけるスタッツおよびアドバンスドスタッツが勝敗に及ぼす影響. *長崎国際大学論叢*, 18: 81-87.

- 13) NBA and USA Basketball (online) YOUTH BASKETBALL GUIDELINES. <https://youthguidelines.nba.com/>, (参照日 2020 年 12 月 5 日).
- 14) 日本バスケットボール協会 (online 1) 2021 バスケットボール競技規則.
http://www.japanbasketball.jp/files/referee/rule/2021_rule.pdf, (参照日 2021 年 12 月 10 日).
- 15) 日本バスケットボール協会 (online 2) 2021 ミニバスケットボールにおける適用規則の相違点.
http://www.japanbasketball.jp/files/referee/rule/2021_mini_rule_changepoint.pdf, (参照日 2021 年 12 月 10 日).
- 16) 日本バスケットボール協会 (online 3) チーム加盟数・競技者登録数.
<http://www.japanbasketball.jp/jba/data/enrollment/>, (参照日 2021 年 12 月 11 日).
- 17) 日本バスケットボール協会 (online 4) Basketball for Life (B4L): 日本をバスケットボールで元気にするための選手育成指針. <http://www.japanbasketball.jp/training/documents/>, (参照日 2021 年 12 月 10 日).
- 18) 日本バスケットボール協会 (online 5) マンツーマンコミッショナーチェック表/報告書
http://www.japanbasketball.jp/wp-content/uploads/U_15_mandf_reports_20210104.pdf, (参照日 2021 年 12 月 12 日).
- 19) 日本バスケットボール協会 (2007) ひとめでわかるミニバスケットボールのルール.
http://u12.japanbasketball.jp/wp-content/uploads/2019/04/MINI_rule_2007_players.pdf, (参照日 2021 年 12 月 10 日).
- 20) 日本バスケットボール協会 (2014) バスケットボール指導教本改訂版 上巻.大修館書店, pp.190-195.
- 21) 日本バスケットボール協会 (2016 a) JAPAN BASKETBALL STANDARD 2016.
http://www.japanbasketball.jp/wp-content/uploads/JBS_2016_v2.pdf, (参照日 2021 年 12 月 20 日).
- 22) 日本バスケットボール協会 (2016 b) バスケットボール指導教本 改訂版 下巻. 大修館書店, pp.144-145.
- 23) 日本バスケットボール協会 (2018) マンツーマン推進リーフレット「なぜマンツーマンが必要か?」第3版.
http://www.japanbasketball.jp/wp-content/uploads/U_15_mandf_Leaflet_20180401.pdf, (参照日 2021 年 12 月 20 日).
- 24) 日本バスケットボール協会 (2019 a) U12 競技環境を考えるための基礎知見?スポーツ科学利用の観点から考える? (U12 カテゴリー第1回全国部会長会議資料).
http://www.japanbasketball.jp/wp-content/uploads/2-6_U12_20190511.pdf, (参照日 2021 年 12 月 20 日).
- 25) 日本バスケットボール協会 (2019 b) U12/U15/U18 リーグ戦実施ガイドライン.
http://www.japanbasketball.jp/wp-content/uploads/U12_U15_U18_League_Guideline_20190401.pdf, (参照日 2021 年 12 月 20 日).
- 26) 日本バスケットボール協会 (2019 c) 2019 年度以降の U12 カテゴリーにおける競技規則の一部変更について.
<http://www.japanbasketball.jp/rule/48790>, (参照日 2021 年 12 月 20 日).
- 27) 日本バスケットボール協会 (2019 d) マンツーマン推進における判定基準の考え方および目指す目的の再確認
http://www.japanbasketball.jp/wp-content/uploads/mandf_reconfirmation_20190513.pdf, (参照日 2021 年 12 月 12 日).
- 28) 日本バスケットボール協会 (2021) U12 カテゴリー指導ガイドライン.
http://www.japanbasketball.jp/wp-content/uploads/JBAU12_Guidelines_ver1_20210909.pdf, (参照日 2021 年 12 月 10 日).
- 29) 日本サッカー協会 (2011) 8人制趣旨開催ハンドブック.
https://www.jfa.jp/youth_development/players_first/pdf/8_system.pdf, (参照日 2021 年 12 月 10 日).
- 30) 小野秀二・小谷究監 (2017) バスケットボール用語事典. 廣済堂出版.
- 31) 内山治樹 (2012) バスケットボールにおけるルールの存在論的構造: 競技力を構成する知的契機としての射程から. 筑波大学体育科学系紀要, 35: 27-49.
- 32) 佐々木クリス (2017) 3P シュートは 1.5 倍の価値がある!? アナリスト視点で Bリーグを見よう (2).
<https://sports.yahoo.co.jp/column/detail/201704270009-spnavi>, (参照日 2021 年 12 月 11 日).
- 33) 鈴木良和 (2017) バスケットボールの教科書 4—指導者の哲学と美学—. ベースボールマガジン社, pp.48-65.